

チャイルドエデュケア研究所

年報 17号 2019

桜花学園大学・名古屋短期大学

2019年度テーマ

「子どもが生き生きと育つための環境や保育者の関わり方」

チャイルドエデュケア
研究所 17号 年報 2019

発行 桜花学園大学・名古屋短期大学

〒470-1193 愛知県豊明市栄町武待48

名古屋短期大学 TEL.0562-97-1306 FAX.0562-98-1162

桜花学園大学 TEL.0562-97-1306 FAX.0562-98-1162

2020年3月31日発行



チャイルドエデュケア研究所機構図

目 的

- 地域の関係機関・団体と連携し、教育・保育、子育て支援等の研究・事業の推進
- 教育・保育専門職の養成・研修・継続教育に関する社会的要請に応える実践・研究・事業の推進
- 大学の教育研究の成果を地域社会に還元し、大学院生・学生等へ研究と学修の機会を提供
- 教育・保育に関する理論的・実践的な課題を、インクルーシブな観点をふまえ、グローバルかつ地域的な視点から研究し、教育・保育の社会的な充実発展に寄与

研修・事業部門

- 教育・保育に関わる理論的・実践的な研究と研究会、交流会、公開講座等の開催
- 教育・保育専門職の養成・研修・継続教育に関わる研究と事業
〈夏のセミナー〉
 - ・卒業生支援
〈冬の講演会〉
 - ・地域へのリカレント教育
- 目的達成のために必要な事業
〈子育て支援室「さくらんぼ」の運営〉
 - ・子育て交流会
 - ・支援室開放
 - ・さくらんぼ通信の発行
 - ・子育て講座・親子講座
 - ・学生ボランティアの参加

研究部門

- 研究所年報等の刊行物の発行
- 国内外の大学、研究機関、地方公共団体、関係団体との学術交流
- 外部機関・団体との共同研究及びそれらの機関・団体からの委託研究
〈教育・保育・子育てにかかわる研究や実践報告〉

相談部門

- 発達教育相談に関わる研究と事業及び教育訓練・研修等

★3つの部門で7つの事業を地域と連携しながら運営していきます。

目次

はじめに

【太田早津美】②

§ 1 研究・実践報告

- (1) 保育・幼児教育領域における脳科学の重要性について
- (2) 幼児期・児童期の英語教育について
- (3) 車いすダンスプロジェクトin インドネシア 報告
- (4) 様々な素材に親しみ楽しんで表現する子どもたち
— 幼稚園4歳児の実践事例から —

【藤田公和】③

【吉見昌弘】⑤

【寺田恭子】⑦

【吉田真弓】⑨

§ 2 2019年度研修報告

- (1) 夏季保育セミナー
- (2) 冬の講演会

【嶋守さやか】⑪

【布施佐代子】⑮

§ 3 2019年度事業報告

- (1) 子育て交流室「さくらんぼ」利用者へのインタビュー
- (2) 子育て交流室「さくらんぼ」ボランティア学生の声
- (3) 子育て講座

【神谷妃登美】⑲

【堀由里】⑳

【太田早津美・平野朋枝・基村昌代・高須裕美】㉓

2020年度事業計画、編集後記

はじめに

桜花学園大学・名古屋短期大学チャイルドエデュケア研究所は、教育・保育専門職の養成校として、地域の関係機関や団体と連携し、教育・保育の研究や研修及び地域の子育て支援事業を推進し、社会貢献を行うよう努力いたしております。研究年報17号は令和初の発刊となりました。新元号となった「令和」という意味は厳しい寒さのあと、美しく咲き誇る梅の花のような希望に満ち溢れた時代にしていきたいとの意味が込められているとのこと。子どもを取り巻く社会がそうした社会になってくれることを期待しています。

平成という時代を振り返りますと、平成2年の「1.57ショック」を契機に、少子化問題や核家族化が進行し、共働き家庭の増加により、母親の子育て負担が多くなり、子どもへの不適切なかかわりや虐待事件につながるが増加しました。そうした傾向を課題として様々な子育て支援対策が打ち出されてきました。一方で、待機児童対策や子育て家庭の仕事と子育ての両立支援（ワークライフバランス）、働き方改革など、子どもを生み育てやすい環境づくりに向けての対策の検討がなされてきました。子育てを楽しみながらできるような環境づくりや、子育て家庭への支援の重要性を感じています。

当研究所の子育て支援室「さくらんぼ」も、地域の子育て支援の一助となるように、子育て交流会や子育て講座を開催しております。年間約3500名の親子に参加していただいており、参加された皆さんは楽しそうにゆったりとお子さんに関わっておられ、リピーターも年々増えています。こうした取り組みが地域の子育て家庭のお役に立っていれば幸いです。ママ友づくりにもぜひ活用してください。

さて、研究所の取り組みには、毎年、現場の保育関係者に向けた研修会があります。卒業後間もない保育士を対象とした夏季保育セミナーと近隣の幼稚園、保育所の幅広い年代の保育関係者を対象とした冬の講演会がありま

す。今年度の夏のセミナーは、あそび歌作家の鈴木翼さんによる実技講習「鈴木翼のあそび歌による講習会」を開催しました。参加者は大いに盛り上がり、現場での実践に役立つ内容だったと喜んでいただきました。冬の講演会には、首都大学東京名誉教授浜谷直人さんによる「多様性がいきる保育ー仲間と共に自己肯定感が育つー」の講演をしていただきました。非認知能力や自己肯定感を育むために、子どもの抱えている様々な状況や課題に、人的環境として周りの大人たちはどのように対応し、支援すべきかについて、具体的な事例を基に話され、現場の先生方に大変好評でした。生きる力の基礎が育つ時期である乳幼児期の保育の重要性や人とのかかわる力の大切さを痛感しました。この研修内容は年報にも掲載しておりますのでご覧ください。

また、年報には今年度の研究所テーマ「子どもが生き生きと育つための環境や保育者の関わり方」を踏まえた研究論文や、実践報告を桜花学園大学・名古屋短期大学・の教員の皆様にご協力いただき、掲載しております。ぜひ子育てや教育・保育実践の参考にしてください。

ますます、人との関係性の大切さや、家庭や地域社会の中で楽しく子育てのできる環境の整備が問われ、子育て支援の重要性が求められると思います。チャイルドエデュケア研究所は地域社会の要請に応えられるよう、地域の関係機関と連携し、教育・保育に関する研究や研修と子育て支援に力を入れていきたいと存じます。来年度はチャイルドエデュケア研究所がより地域の子育て支援に貢献できるような新しい取り組みを考えております。今後とも皆様方のご支援とご協力をよろしくお願いいたします。

令和の時代がより子育てしやすい時代になり、次世代を担う子どもたちが未来に希望を持てる時代になることを願っております。

チャイルドエデュケア研究所長
太田早津美



保育・幼児教育領域における脳科学の重要性について

藤田公和（保育学部 保育学科）

キーワード：発育・発達、脳・神経、子育て

はじめに

「脳の時代」「脳ブーム」と言われて久しいが、近年「脳」に関わる多くの一般書や雑誌が刊行されている。特に日経サイエンスなどの科学雑誌には、最新の脳科学に関する研究が頻繁に紹介されるようになってきている。また、NHKなどでも脳科学に関わるTV番組がしばしば放映されている。近年、CG画像が実に鮮やかに制作されていることから、そのようなBD(DVD)の利用は、適切な解説を加えれば、目に見えない脳内のミクロの世界を理解するために有効である。筆者は不思議な縁で、28歳から現在まで医学領域での脳科学の研究を継続してきた。極めて専門的な研究以外に、脳に関わる様々な情報に接することで、脳科学領域の知識・情報を保育・教育分野にも取り入れる必要があると考えるようになった。

「子どもの発達は脳の発達である」と言い切ってしまうと、言い過ぎであろうか。少なくとも、完全に間違っていると考える人はいないと思われる。子どもは出生前には心臓が働き、身体の様々な臓器が活動して生命活動を始めている。これは大脳および脊髄から出ている自律神経の働きによるものである。出生後子どもは視覚が発達したり、様々な運動動作ができるようになったり、言葉を覚えたり発したり、他人に共感したりなどなど、人として成長していく。この発達を支えているのは中枢神経系、特に大脳皮質の神経細胞の発達に他ならない。ヒトの卵子は直径0.16mm、重さは1.5 μ gであり、細胞数は1個である。それが10か月後には、大脳の神経細胞だけで140億個、神経細胞の働きや生存をサポートする3種類のグリア細胞はその8~10倍存在する。多くの人が子どもの脳の発達をスキヤモンの発育曲線をもとに説明しようとする。しかしスキヤモンの発達曲線は各臓器・器官の重量の増減傾向を示すものであって、機能の発達を示しているわけではない。乳幼児期における脳重量増加の最大の要因は、神経細胞の樹状突起の伸長である。樹状突起が伸びることで他の神経とつながり、電気の流れる回路の選択肢が増えることは脳機能の向上に繋がる。その後、どの電気回路にどの順番でどの強さで電気を流すかということの取舍選択、樹状突起にあるスパインの増加・変化がいわゆる脳の発達であり教育である。

授業で取り上げている課題・話題

現在、筆者は桜花学の中の「食と生命の科学」(3人で5回づつの授業を担当)および大学院の体育特論Ⅰ、Ⅱで、脳科学の内容を教授している。また、毎年夏季休暇期間中に本学で実施されている教員免許更新講習でも脳科学の内容で講座を担当している。講義の内容は対象者によっても異なるが、取り上げる具体的なテーマは①脳・神経の発達、中枢神経系および末梢神経系の機能、大脳皮質の役割分担、②記憶・学習、③脳の障害、④睡眠、⑤男脳・女脳、⑥妊娠・出産が母親の脳を育てる、⑦運動機能の発達、⑧言葉の発達、⑨脳の病気(認知症、うつ病など)などである。授業の概要は以下のように、保育・教育、子ども、子育て支援などの観点を踏まえたものとなっている。

①脳・神経の発達では受精からおおむね20歳までの脳・神経の発達について解説している。大脳皮質の役割分担、樹状突起の伸長、神経細胞の成長や生存を助けるグリア細胞の働き、神経同士がつながるシナプスやスパインの働き、そして樹状突起の伸長を促すための環境の問題などを取り上げている。②記憶は研究分野によって様々な定義・分類が行われているが、筆者の研究分野では短期記憶、長期記憶、身体で覚える記憶の3種類に分類している。子どもの記憶は基本的に短期記憶(主に海馬が担当)であり、長期記憶(大脳皮質の記憶中枢が担当)にはなりにくい。幼児期に行われる英語や漢字、フラッシュカードなどのいわゆる短期記憶を中心とした早期教育や幼児期に行う身体運動やスポーツ活動の意義について考えさせている。③脳の障害ではADHD、LD、自閉症、虐待によって受ける脳の傷害、切れる子どもなどの神経精神障害の解剖学的、生理学的、薬理的な視点から原因・症状・治療法などを説明している。脳の障害で治療法まで確立されているのはADHDくらいで、保育現場でよく出会う自閉症は、現時点で病気の原因も明確にされていない。大脳辺縁系の先にある扁桃体の神経細胞は、虐待によって死滅することが最近の研究によって明らかにされている。扁桃体は動物の本能をコントロールしている部分で、いわゆる「切れる」というような感情が突発的に起こってくる原因の一つは、扁桃体の神経細胞が虐待によって死滅・減少することによると考えられる。虐待の連鎖、すなわち虐待を受けて育った人は、大人になって自分

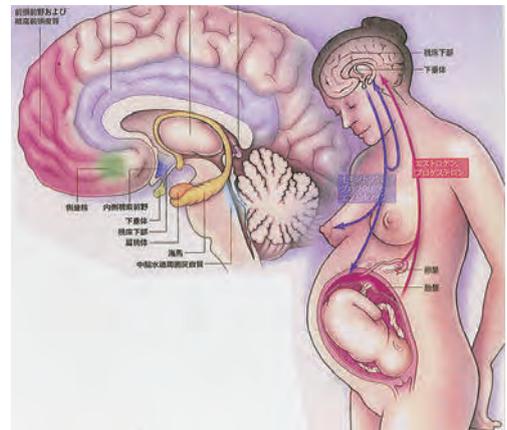
の子どもを産んだ後に子どもを虐待することが多くなるという現象は、扁桃体の神経細胞の減少と関連付けられる。さらに、子どもの目の前で繰り返される夫婦および兄弟のけんかや殺伐とした言葉のやり取りを繰り返し聞くことで、同様の死滅現象が発生すると指摘されている。また、大脳皮質の前頭前野にある46野の神経細胞も同様の感情抑制作用がある。自分の感情をコントロールする脳部位はこの2か所で担当し、特に幼児期・学童期の子どもは、46野の神経細胞の樹状突起の発達を促すことが他人との協調性に繋がることが明らかである。

④睡眠覚醒リズムの形成は、まさに脳機能の発達そのものである。出生後からおおむね10歳まで、睡眠・覚醒リズムやレム睡眠、ノンレム睡眠の出現パターンが大きく変化していく。これは視床下部にある視交叉上核(体内時計の中核)、松果体(睡眠物質であるメラトニンの放出)、橋・延髄部位にある網様体賦活系(青斑核)および抑制系(縫線核)の4部位の神経がつながり、互いに協調して機能することで睡眠覚醒リズムが徐々に形成されていくのである。特に幼児期の遅寝遅起きの習慣や睡眠不足状態は、このような脳の発達に異常を起こし、切れやすいとかうつ病など心の病の原因となることが指摘されている。さらに睡眠時間の長い子どもは、短期記憶や感情のコントロールに関わる海馬の体積が大きくなる(つまり、樹状突起の発達が顕著である)ことも確かめられている。

⑤近年、性同一性障害(LGBT)という言葉が頻繁に使用されるようになってきた。女子大に、外見は男性、心(脳)は女性の学生が入学してくるような時代になっている。男性、女性の識別は性染色体(DNA)によって決定されるのではなく、脳の構造や働きによって決められるものであると考えられている。出生後、男女の脳はいくつかの脳部位で異なった発達をすることが知られている。いわゆる空間認知力は男性の方が優れていると言われている。一方、左右の脳をつなぐ脳梁の膨大部、大脳辺縁系および海馬は女性の方が大きいことが分かっている。それ以外にも大脳の各部位の体積に性差のあることが報告されている。このような違いは縄文時代以前からの男女の性的役割と関連性があると考えられてはいるが、その答えは現在の脳科学では明らかになっていない。

⑥妊娠・出産前後の女性のホルモンや脳内の変化については、NHKが2016年に放映した「ママたちが非常事態」のDVDの視聴を強くお勧めしたい。この番組は、特に子育てに悩む世の女性を勇気づける内容で

あり、放送された後に大きな反響があった。なぜママ友が必要なのか、夜泣きはどのようなメカニズムで起こるのか、子どもの我慢する力はどのように育成されるのか、そして育児中イライラするのはなぜなのか、というような課題について、脳科学の視点からわかりやすく説明している。また、日経サイエンスにも類似の研究成果(子育てで賢くなる母の脳)が公表されている。すなわち、女性の生殖ホルモンであるエストロゲンとプロゲステロン、分娩時の子宮の収縮を誘発するオキシトシン、乳腺を刺激するプロラクチン、分娩時の苦痛を和らげるエンドルフィンなどが女性の脳の発達に影響を及ぼしている。特にオキシトシンは愛情のホルモンと言われてきたが、一方で攻撃性を増す作用もあることが明らかになった。また妊娠ラットは未婚のラットと比較して、内側視索前野の神経細胞体が大きくなることが示された。内側視索前野は母性の中核と考えられている。



(文献2から引用)

最後に

以上、文字数の関係で授業内容の紹介は限られるが、課題の選択を誤らなければ、脳科学は保育・教育分野に欠かせない有用な情報や知識を提供することになる。保育・教育が単なる経験論で終わらないよう、あらゆる現象の原因や裏づけを科学的・理論的にきちんと理解する必要がある。脳科学がこれまでの保育・教育分野の授業に新しい視点を持ち込むことを期待している。

文献・資料

- (1) NHKのDVD「ママたちが非常事態」2016
- (2) 別冊日経サイエンス181. 22-31.2011年



幼児期・児童期の英語教育について

吉見昌弘（名古屋短期大学 保育科）

キーワード：英語教育、学習指導要領、幼児期、教育改革

1 教育改革における英語教育の新しい流れ

「幼児期に英語教育は必要ですか?」と聞かれることがよくある。社会状況がめまぐるしく変化する中、簡単には説明できない問題である。この古くて新しい問題について、あらためて一度整理してみたい。

近年、教育改革が唱えられ、小学校では、2年間の移行期間の後、2020年度から新しい学習指導要領が全面実施となっている。話題としては、プログラミング教育が導入されたり、アクティブ・ラーニングなど能動的に学び続けるような授業の工夫・改善を重ねることが大切とされている。

さらに、社会的な関心が高いのが、小学校の英語教育である。今回の改訂では、小学校3、4年生から「外国語活動」が組み込まれ、さらに教科として「外国語」が設置された。

それでは、幼児期の英語教育はどうであろう。結論からすると、筆者が知る限り、過去の文部科学省の答申や各種法令の中に、幼児期の英語教育について明確なコメントは無いと思われる。それらを踏まえると、現状では、児童期の英語教育は容認、推進の傾向があるが、幼児期の英語教育については、時期尚早であると考えるのが妥当であろう。

しかし、実際の保育現場では、筆者が知る限りでも、幼稚園や保育所において、英語を使った活動を遊びの中に取り入れたりする園は多く、また保護者との会話の中でも、英語教育に高い関心があることがうかがわれる。名古屋近郊でも、幼児を対象としたインターナショナルスクールや英語教室などが開かれ、多くの子ども達が幼児期から英語を学んだり、遊びに取り入れたりする風景がもはや珍しいものではなくなっている。

また、幼稚園・保育所に通う保護者への子育て支援の観点から英語教育の必要性を感じることもある。たとえば、最近の好景気に伴い、自動車産業等が盛んな愛知県でも外国籍の子ども達が増加傾向にあり、東京と並んで全国的にも最多の多国籍の外国人が地域で暮らしている。そのため愛知県が作成している「あいち多文化子育てブック～あいちで子育てする外国人のみなさまへ～」なども日本語に併記して、ポルトガル語、英語、中国語、フィリピン語、スペイン語の5つの言語で発行するなどの配慮がされている。愛知県内でも地域差が大きいものの、外国籍の子ども達が幼稚園、保育所へ通う機会も増えており、それに保育者がどう向き合うのかといった問題も、保育者養成の観点から子どもの英語教育に関連してくると思われる。

ここでは、幼児期から小学校の児童期までの英語教育をどう捉えていけば良いのか、教師、保育者、保護者、子どもの立場から、教育改革の流れを踏まえて筆者なりの考えを述べていく。

2 学習指導要領等からみた英語教育

(1) 「外国語活動」

2020年度から実施される、新しい学習指導要領の「外国語活動」は小学校3、4年生が対象であり、その目標は、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」とある。外国語（通常は英語）を使って「聞くこと」「話すこと」の言語活動に加えて、さまざまな国の文化や生活習慣も視野に入れてコミュニケーションを図る必要があると考えられる。

具体的に英語を使う場面も想定され、たとえば、家庭での生活や遊び、学校での学習、挨拶、自己紹介、買い物や食事など日常生活のさまざまな場面を想定して英語を活用しながら授業を進めることが想定されている。

(2) 教科「外国語」

さらに、教科として「外国語」が小学校5、6年生を対象に新設された。その目標は、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す」と示され、小学校3、4年生で学んだ「外国語活動」を踏まえ、「聞くこと」「話すこと」に加えて「読むこと」「書くこと」の言語活動が中心になり、中学校の英語教育の連携を想定している。ただし、教材についての留意事項に「英語を使用している人々を中心とする世界の人々や日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史、伝統文化、自然などに関するものの中から・・・適切な題材を変化をもたせて取り上げる」とあるように、言語体系そのものの習得と同時に、その背景にも視点を置くことが求められている。

これらの小学校の英語教育については、中央教育審議会における教育課程部会（2006年3月）においても、小学校の英語教育には「英語のスキルの向上を目標とする」ことと「英語を用いて、言語や文化に対する理解、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度、国際理解を深める」ことの2つの目標が示されたが、小学生が実際に会話表現や文法などを活用する場面は

限られるため、後者を重点的に目指すのが良いと考えるとの意見がみられる。

筆者も同感であり、また幼児期も同様と考えると英会話などのスキルを子ども達に教えるよりも、国籍や言語の異なる子ども同士、保護者、保育者がお互いに国際理解を深めていくための英語教育が大切であると考えます。

3 幼稚園教育要領等からみた英語教育

(1) 保育所保育指針

幼児教育の分野からは英語教育をどう捉えているだろうか。保育所保育指針では、英語教育について直接的な表現はないものの、第1章総則(5)保育所の社会的責任などでは、「ア 保育所は、子どもの人権に十分配慮するとともに、子ども一人一人の人格を尊重して保育を行わなければならない」とあり、解説書では、「子どもの発達や経験の個人差等にも留意し、国籍や文化の違いを認め合い、互いに尊重する心を育て、子どもの人権に配慮した保育」であることを確認することが大切とされている。

さらに、「第2章保育の内容「人間関係」の内容で「③ 身の回りに様々な人がいることに気づき、徐々に他の子どもと関わりをもつて遊ぶ」とあるが、解説書では「高齢者など多様な年代の人や障害のある人、外国人などと接する」などの機会に「それぞれの人の特性や多様性に気づくように関わって」とあるように、外国人と接した時にその人の特性や多様性に気づくように援助することが求められている。

また、第2章 保育の内容の保育全般に関わる配慮事項として、「オ 子ども国籍や文化の違いを認め、互いに尊重する心を育てるようにすること」とあり、外国籍の子どもをはじめ、多様な文化を背景にもつ子どもを尊重することが保育に求められている。

さらに、第4章 子育て支援「外国籍家庭など、特別な配慮を必要とする家庭の場合には、状況等に応じて個別の支援を行うよう努めること」とあるように、子育て支援においても、保護者である外国籍の家庭への支援が必要とされている。将来的には、外国籍家庭の状況に応じて、文化や習慣を理解し、日本語以外の言語によってコミュニケーションをする能力が保育者の資質としても必須となってくると考えられよう。

(2) 幼稚園教育要領

一方、幼稚園教育要領では、第1章総則 第5 特別な配慮を必要とする幼児への指導として「海外から帰国した幼児や生活に必要な日本語の習得に困難のある幼児については、安心して自己を発揮できるよう配慮する」ことが求められている。実態として、国際化の進展に伴い、外国人幼児や両親の国際結婚などが増えつつあることを踏まえ、対象となる保護者とその子ども達の文化や生活習慣を理解した上で、幼児や保護者と関わる体制を整えることが必要とされている。

保育内容においては、第2章 領域「環境」内容の取扱いで「(4) 文化や伝統に親しむ際には、…異なる文化に触れる活動に親しんだりすることを通じて、社会とのつながりの意識や国際理解の意識の芽生えなどが養われるようにすること」とあるように、実際の保育活動においても異なる文化があることを理解するような援助が必要であることが示されている。

3 これからの幼児期・児童期の英語教育

これまで、小学校の英語教育から幼児期の英語教育のあり方について、文部科学省の方針や研究者らの研究から概観してきた。現状としては、①幼児期の英語教育の目的(ねらい)を明確化すること。②単なるプログラムではなく、教育課程・保育課程に組み込み担任も含めた保育の流れの中で位置づけていく必要があること。③保育者として保護者向けに英語のスキルを学ぶと同時に子どもの保育では、背景となる多様な文化や生活習慣の理解を優先することが大切であると考えられる。

今後は、英語教育の是非を問うよりも、まず、保育現場での英語の実践活動を試行的に実施し、その目的や効果を検証しながら、現状、そして将来の社会状況に対応して保護者への支援、そして子どもの英語教育の活動を展開していくことが求められよう。

引用・参考文献

- ・愛知県 社会活動推進課多文化共生推進室
<https://www.pref.aichi.jp/soshiki/tabunka/>
アクセス日2019/12/25
- ・中央教育審議会 教育課程部会 (第39回) (2006年3月)
http://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11293659/www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryu/1265505.htm
アクセス2019/12/27



車いすダンスプロジェクトin インドネシア 報告

寺田恭子（保育学部 国際教養こども学科）

キーワード：車いすダンス、障がい児、インドネシア

1 はじめに

2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催が決定した後、パラリンピックスポーツやアスリートへの関心は徐々に高まった。しかし、言うまでもなく全ての障がい児・者がスポーツや運動をより身近に感じて実践しているわけではない。特に障がいの重い子どもたちは、彼らを支える側に「障がいの重い子ども達は運動やスポーツができない身体である」という固定観念があったり、彼らの日常生活に必要な支援を優先すべきであるという考え方があれば、運動やスポーツに接する機会はさらに失われていく。

筆者は、障がいが高くても身体活動を行うことは必要であると考え、1995年から重度の障がい児・者を支える人たちと共に、彼らが楽しめる身体活動の1つとして車いすダンスの実践と普及活動を継続している。またその過程で、車いすダンスが重度身体障がい者の呼吸循環器系に及ぼす影響を明らかにするなど¹⁾、いくつかのエビデンスを蓄積しながら車いすダンスの導入の必要性を指摘してきた。車いすダンスは最重度の身体障がいがあっても立位者のアシストとダンス方法を工夫することで誰でも楽しむことができる汎用性の高い身体活動であると言える。

今回は、一人でも多く子どもたちにその楽しさを体感してもらいながら支援者への理解を深めるため、インドネシアのジャカルタで車いすダンス講習会を開催した。ここではその活動と共に、講習会後の車いすダンスの様子（現在まで）を併せて報告する。

2 方法

筆者は、2010年から認定NPO法人 アジア車いす交流センター（WAFCA: Wheelchairs and Friendship Center of Asia）の活動に理事として参加している。WAFCAの目的は、アジアの障がい児・者が社会で自立できる環境作りを軸として、スポーツ・教育分野における支援や交流、バリアフリー社会の実現に寄与することである。近年では、障がいのある子どもたちが社会で活躍できる機会を得られるよう、教育支援基金や学校環境のバリアフリー化をサポートする教育支援事業を行うことと、特に重度障がいのある子どもたちとその家族のQOLの向上にも力を注いでいる。このWAFCAと協力し、WAFCAの海外拠点であるWAFCAI（インドネシア）のコーディネートによってインドネシア・ジャカルタにおける車いすダンス講習会を2017年8

月15日に開催した。実施した施設はサヤップ・イブ財団（南タンゲラン市）である。

3 訪問施設

本財団は1955年にジョグジャカルタで設立され、ジャワ島西部に3拠点を持つ社会省管轄下の財団である。訪問先の施設は、親と暮らせない子どもの療育と近隣に住む障がい児も含めたりハビリテーションおよび障がい児への教育支援等を行なっている。5歳から23歳までの男女35名と先生および2交代制の介助スタッフが共に生活している。知的障がい児はこの施設から学校に通い、重度障がい児の毎日の通院送迎は教員が担当する。現在では特別支援学校の役割も備えているので車いすの子どもは内部通学をするが、重症心身障がい児は市内に受け入れ先の学校がなく、十分な教育を受けることができない。

インドネシアでは県レベルで1校しか特別支援学校がない故、障がい別の学校もない。通学は聴覚障がい児、知的障がい児、松葉杖使用児などが優先される。このような現状から、本校は内部の空き地に特別支援学校を作り、保護者がいても重度障がいの子もたちが通学できる教育環境を作る計画を立てている。因みにインドネシアでは、障がいのある子どもが道端に捨てられるケースもあり、警察が保護し地域の社会局の一時預かりを経て施設に入所する場合もあるという。

4 車いすダンス講義・講習

当日は、施設内外に住む車いすを使用する児童10名とその親、財団スタッフが待機しており、最初に財団の説明があった。その後、筆者が車いすダンスに関する説明（約30分）を行った。具体的な内容は、車いすダンスは立位者のアクティブアシストによって最重度の障がい児・者もダンスが可能であるということ。また、実践を通して心身が変化していく様子を写真で理解して頂いた。さらに日本での活動と広がりについて説明した。財団スタッフは、この時点で車いすダンスに強い関心を示し、活発な意見交換が行われた。

休憩の後、屋外の踊り場に移動した。総勢20名以上には手狭な場所だったため、お互いの間隔を上手く取りながら車いすダンス実践が始まった。

ステップ1（導入と基本動作）：立位者と車いす使用児（以下、

子ども)がペアになり向かい合う。ダンスの基本は相手の表情や動きがよくわかるように、最初は向かい合って手を繋ぐ形(ホールド)が良いというベーシックな部分を伝えた。その後、音楽に合わせてのタッピングや立位者と子どもが共に回転する方法などを教えた。次に全員で円になり、円形で踊れる簡単な振り付けをして車いすダンスを行なった。途中、車いすをクルクルと回転させたり、円の中心に子どもたちがスピードを出して集まるような振り付けも取り入れ、非日常動作を車いすで楽しむことができた。

ステップ2(基本動作とダンス遊び):軽快な音楽で車いすの横揺れ(チェックムーブメント)と回転を組み合わせた一連の動作を教え、それらをダンス遊びへと発展させた。具体的には、一連の動作をフロアの端で行い、その後立位者が車いすを前方に押し出す。立位者の手を離れた車いすは惰性で直進する。車いすの先には、柔らかい布と、その上に散りばめられた多くの風船があり、車いすが接近したら布の両端に待機していた人が布を上を持ち上げ、車いすはその下をくぐる。布をくぐり抜けた先には、子どもを迎えてくれる保護者たちが待っている。布をくぐる時には、布の上部に置かれていた風船が落ちるので、風船に触れたり、その動きを見て楽しむなど、子どもたちは顔を上げるようになる。車いすのスピード感や風を切る感覚を楽しみ、風に揺れる布の動きを見つめる。日常生活の中で一瞬でも非日常を感じられるように工夫した。

約40分の実践を通して、泣き出してしまう子ども、最後まで楽しそうに参加できた子どもなど、子どもたちの反応は様々だったが、全体的には初めての体験に楽しく参加している様子であった。保護者からは、身体を動かすことは楽しい、これからもやっていきたいという感想をもらった。また財団のスタッフらは実技にも強い関心を示し、今後に活かしたいとの積極的な姿勢を見せてくれた。

5 現状および今後の課題

本講習会をきっかけにして、財団では毎週金曜日に車いすダンスの時間を設け、継続している。現在は、さらに新しい内容を学びたいという希望がある。その持続可能な具体的方法はさらに検討していきたい。また、教員らは周辺の特別支援学校に出向し、車いすダンスを教え、近い将来に障がいのある子どもたち100人の車いすダンス大会を開催するという計画も立てていると言う。日常生活の中に“踊る”文化のあるインドネ

シアでは、車いすダンスは日本よりもむしろ受け入れが柔軟であるかもしれないので、この点も視野に入れたサポート内容の充実が必要である。

筆者はタイでも車いすダンスの講習を実施しているが、共通に感じることは両者(子どもたちに関わる大人)が受け身ではなく、学んだことを自分たちの力でアレンジしアクティブに実践していくパワーがあるということだ。障がいのある子どもたちの日常生活は、環境によって大きく左右される。障がいのある子どもたちを支える大人が、自身の欲求を思うように伝えられない子どもたちの気持ちに寄り添い、彼らの楽しみを増やせる環境を作ることに楽しさを感じながら取り組んで欲しい。その楽しさの一つに車いすダンスが定着し発展するよう、インドネシアの風土を理解しながら、さらなる支援を実践していきたい。

最後に、今回のプロジェクトでは、サヤップ・イブ財団以外に、私立の特別支援学校(フィリアル・ブカシ)や、WAFCAIがサポートしている外出が難しい子どもたちの自宅も訪問し、そこで個別の車いすダンス講習を行った。様々な事情で多くの問題を抱えている障がいのある子どもたちの現状に必要な支援は多岐にわたる。今後はさらに視野を広げ、子どもたちのQOLの向上を目指したい。



【円形で踊る】



【ダンス遊び】

- 1) K.Terada et.al., Training effect of wheelchair dance on aerobic fitness in bedridden individuals with athetospastic cerebral palsy rated to GMFCS level V. European Journal of Physical and Rehabilitation Medicine. Vol.53(5);744-50, 2017



様々な素材に親しみ楽しんで表現する子どもたち —幼稚園4歳児の実践事例から—

吉田真弓 (名古屋短期大学 保育科)
キーワード：表現活動、環境、保育者の援助

1 子どもたちの楽しむ姿を思い描いて

私は昨年度まで、公立幼稚園の教諭として働いていました。子どもたちと保育活動を進めていく過程で、私は子どもたちに様々な体験や経験をしてほしいと常に考えていました。そのためには子どもたちが楽しんで活動をする前提として、保育者自身が興味をもって楽しむことが大切であると考えていました。

例えばその一つに、様々な素材に触れて遊んだり作ったりするという活動があります。毎年10月になると、私には大きな仕事(?)が待っています。それはドングリを拾いに行くことでした。このドングリ拾いは、私にとって長年の恒例の行事となっていました。10月の声を聞くと、もうそろそろドングリ落ちているかな?と、わくわくしてきます。ドングリにはたくさん種類があるのですが、私が集めてきたのは、マテバシイという種類でした。このマテバシイは、大きくて立派なドングリで、他のドングリに比べて、虫もつきにくいのです。そのため子どもたちの遊びや製作活動にはピッタリです。渋味も少なく、そのまま炒って食べてもおいしいです。また、少し手間をかければドングリ団子やクッキーなども作ることができるのです。

毎年マテバシイの実りの時期になると、私はバケツに1~2杯拾ってきます。最初、大量のドングリを職場に持っていった時には、同僚達から「先生、そんなにたくさんのドングリ、どうしたんですか?」とか、「一体何に使うのですか?」などと驚かれました。しかし、毎年のごとになると「今年もまたドングリの季節になりましたね」と言われるようになり、マテバシイを利用した活動は、自然に子どもたちの生活の中に定着してきました。

次に、活動過程を少し紹介します。こうして大量のマテバシイを拾ってくると、まず初めに私がすることは、ドングリの水洗いです。タライにマテバシイを入れ、水道水でジャブジャブ洗います。次に、きれいになったものをざるに入れて日当たりの良いところに置き、乾かします。一日乾燥させた後、それらをいくつかのビニール袋に分けて入れ、一晩冷凍庫に入れておきます。これは、虫が出てこないようにするための対策です。クヌギなどと違い、実際はマテバシイから虫が出てきたところを見たことがないので、この作業は必要ないのかもしれませんが、念のため行うようにしています。

こうして下処理したマテバシイは、多様な活動の素材として、利用することができるのです。

2 ドングリ笛遊び

まずは、オーソドックスですが、子どもたちと一緒にドングリこまを作ります。何個か見本を作って保育室に置いておくと、関心をもった子が「先生、あのこまどうしたの?」「作ってみたい」「ほしい」などと言って、私のところへやってきて、自分のこまを作るのです。すると、ドングリこまを手にしているのを見た別の子どもたちが、それに興味をもち、やってくる・・・といったことが繰り返され、クラスにドングリこま遊びが広がっていきます。

また、降園時には、ドングリ笛を作ったりもします。降園時は、全園児が一斉に園庭に出て挨拶をした後、保護者が迎えに来るまで、テラスに座って待ちます。その時、待ち時間が長い子で30~40分ほど時間があります。その間、友だちや保育者とおしゃべりをしたり、あやとりの教え合いをしたり、ハンカチで遊んだり、思い思いのことをして時間を過ごします。私はこの時間を利用して、ドングリ笛を作りたいと言ってくる子に、作り方を教えていました。

ドングリ笛を作るには、まずドングリの殻斗を取った堅い部分を、コンクリートなどのざらついた面のある場所で削ります。この作業は子どもたちには結構大変で、根気がないと続きません。そのため最初は「やりたい!」とやって来た子どもも、いつの間にかその場からいなくなることも珍しくありません。けれどそんな中、どうしても笛がほしいという思いを強くもっている子どもたちは、一生懸命ドングリに穴をあけようと頑張るのです。

次に、穴があいた子に殻の中身をかき出す棒を渡すと、熱心に中の実をほじくり出します。最後は、私が中をきれいにして、仕上げます。こうして出来上がった笛に唇を当て、ドキドキしながら笛を吹く子どもたちの姿を見るのは、とても楽しいことです。最初はうまく音が出ませんが、コツをつかむと大きな良い音が鳴ります。音を出せた子どもはとても嬉しそうで、「先生、音が出たよ!見てて!」と得意げに見せにきます。

3 製作活動への取り組み

12月にもなると、マテバシイの中身が堅くなり、穴をあけたり中身をかき出ししたりすることができなくなってきます。そのためこの頃になると、残りのマテバシイを使って、クリスマス

の製作をクラスのみならずで行います。

ドングリをベタベタと貼り付けてクリスマスリースを作る年もありますが、昨年度は厚紙をホールケーキに見立てて、クリスマス



ケーキを作りました。たくさんあるドングリをボンドで自由に貼っていき、思い思いに自分のイメージしたケーキを作っていきます。ドングリを貼ってから、色画用紙やお花紙を使って、



デコレーション用のチョコレート、ゼリー、キャンドルなどを自由に作り、飾っていきます。最後には、「ボクはチョコレートケーキにする!」「私はいちごのケーキ!」「レインボーのケーキ

がいい!」などと言って、絵の具で着色しました。

出来上がったケーキはどれもとてもおいしそうで、お互いのケーキを見合っては、嬉しそうにしている子どもたちでした。

4 経験の積み重ねで手先が器用に

冬休み明けの3学期には、製作コーナーで空き箱を切ったり貼ったりして組み合わせ、遊びに必要なものを作ったり、紙に迷路を描いたり、4月当初に比べて、工夫して作ったり、考えて遊んだりする姿が多く

見られるようになりました。そんな中、今まで担任や支援員の先生に作ってもらっていたスズランテープの三つ編みを作ることがブームとなり、自分で試



行錯誤しながら長い三つ編みを作る姿も見られるようになりました。作ったものは、頭に巻いたり、腕輪にしたりして、遊びの中でいろいろ活用されていました。

5 節分行事に向けた製作

2月には、全園児で節分行事に参加します。全クラスの子どもの日に向けて、豆を入れる升と、鬼のお面を作ります。4歳児は、自分の好きな色の画用紙を選んで鬼のかぶり



ものを折り、あとは好きなように色画用紙を貼ったり、クレパスで模様を描いたりして製作していきました。熱中して楽しんで作っている時は、「どうしたらいいのかな?」と戸惑いを見せる様子はなく、子どもたちはそれぞれが、自分の作りたい鬼を想像しながら、ひたすら作業を進めていきました。そして出来上がったものを持って「見て!この鬼、こわいでしょ?」「私はかわいい鬼を作ったよ!」と自信満々に、そして嬉しそうに見せに来ます。どの鬼のお面も生き生きとしており、どれ一つとして同じものはなく、その子らしさが表現されていました。



子どもたちの遊びや表現活動などに関わり、子どもが生き生きと園生活を送るためには、日々、子どもたちの発達を踏まえた方法を活用して、活動を展開していく保育者の関わりが必要であることを改めて感じました。このような活動の積み重ねが子どもたちの興味や関心を広げ、「やってみよう!」という意欲につながっていくのではないかと思います。こうした保育活動の基本原則を踏まえて、保育者は子どもたちの興味や関心、そして保育者の教育的意図(子どもたちに経験させたいと思うこと)等をよく考えて、環境を設定していくことが大切であると考えています。

夏季保育セミナー

嶋守さやか（桜花学園大学 保育学部）

名古屋短期大学・桜花学園大学保育学部を卒業した若手の保育者を対象とした夏季保育セミナーが6月23日に開催されました。「皆さんが元気になるようなセミナーを」と企画した夏季保育セミナー当日、まずは開会の挨拶、新任教員の紹介・諸連絡がされた後、元気いっぱいの鈴木翼さんによる「鈴木翼のあそびうた講演会」、そして参加者のみなさんとともに学ぶ、名短・桜大の教員による分科会「明日からの保育に役立つワークショップ」を行いました。

- 日 時：2019年6月23日（日）9:30～12:45
- 場 所：名古屋短期大学・桜花学園大学
- 主 催：チャイルドエデュケア研究所
- 参加者：全体会107名
 - 分科会A参加者：17名
 - 分科会B参加者：13名
 - 分科会C参加者：18名
 - 分科会助言卒業生：17名
 - 教職員（講演会31名、分科会26名）

〈プログラム〉

1. 開会式 9:30～
挨拶、新任教員の紹介、諸連絡
2. 全体会 9:45～11:15
演題「鈴木翼のあそびうた講演会」
3. 分科会 11:30～12:45
 - A：感じたことを描いてみよう
 - B：感じたことを音楽で表現してみよう
 - C：気になる子どものわらべ歌

【「鈴木翼のあそびうた講演会」】

「かみなりどんがやってきた」という手遊びを知っていますか？子どもたちの前で「かみなりどんがやってきた」と手遊びをすれば、子どもたちも保育者のみなさんも大変、盛り上がりますよね？

2019年度の夏季保育セミナー全体会の講師は、『かみなりどんがやってきた』を作った人ですよ！と満面の笑顔で登壇し、元気溢れる自己紹介をされた鈴木翼さんでした。



「さあ、みんなでやってみよう！」との鈴木翼さんの呼びかけで参加者は立ち上がり、「かみなりどん」の手遊びがはじまりました。「かーくすのーは？」へそ！わきのした！あご！ひざ！参加者は次々と工夫しながら、鈴木翼さんの声にあわせて、からだをどンドンひねります。「モデル感！モデルみたい！」「指を1本出して！」参加者は2人組になって、こめかみ！ほっぺ！と互いにふれあいます。鈴木翼さんの声がかかるたびに、参加者からの大きな笑い声が上がリ、どンドン笑顔になっていきました。



「実はね、二人でもできるんですよ」と舞台に呼ばれたのが、桜花学園大学の松永康史先生です。在学時代になじみ深い先生が登壇したことで、参加者はさらに大盛り上がり！gaagaaS(ガーガーズ)が「かみなりどん」を演奏し、鈴木翼さんが松永先生に、「さわりませー！」と声をかけました。二人は手を合わせ、肩を組み、ふれあい遊びをするうちに、鈴木翼さんの「親友の距離感」という表現のとおり意気投合し、場内の空気があたたかくなりました。

鈴木翼さんの活動のなかで出会った子どもたちの様子の可愛いエピソードもトークに交えていきます。「かみなりど



んがやってきた(…中略…)セーフ!イエス!!って乳児クラスでするでしょ?すると、『イエッシュ』って、腕を下から上に動かすの、揃うのが楽しい。できていても、できてなくてイエス!!「もう、子どもたちの笑顔がキラキラしてればそれでいい!!」参加者も、それぞれの保育現場で担当している子どもたちの笑顔を思い出すのでしょうか。笑顔がさらにキラキラと輝いて、歌声や笑い声が高くなります。

そこから、かんたんなまねっこ遊び、「ちょっとだけたいそう」、パネルシアターコーナーの「おばけマンション」、手遊びの「メデューサかえった」と、楽しさと笑い声満載の魅力的なひとときの後に、gaagaaSが登場して場を盛り上げてくれました。

そして、鈴木翼さんの原案、絵本『なんでやねん』、『おふろでなんでやねん』のお話を楽しく聴きました。

楽しかった時間は瞬間に過ぎ、鈴木翼さんはたくさんの手遊び、ふれあい体操、絵本の朗読、ダンス、おもしろトークと多彩に盛り上げて下さいました。

「子どもたちの笑顔を思い浮かべながら、あそび歌の面白さ

を感じてほしい」という夏季保育セミナーの開催主旨と願いを抜群に叶えてくださった鈴木翼先生。最後に『にじ』を全員で合唱しました。アンコールの鈴木翼先生の言葉が、優しく心に響きました。

落ちこんだ日はきっといい日
あしたにつながるたいせつな日
きっとあとでそう思えるさ
だいじょうぶ前を向いて歩こう

さて、ここまでこの記事を書かせていただいてから、鈴木翼先生のFacebookを拝見いたしました。なんと、2019年は鈴木翼先生の10周年記念の御年でした。

今後とも、益々のご活躍を心よりお祈りいたします。

★鈴木翼さんのプロフィール★

あそび歌作家。私立保育園、子育て支援センターに8年間勤務後、2009年、あそび歌作家として活動開始。保育雑誌を中心に、多数の連載、執筆活動を行いながら、全国でファミリーコンサート、保育者向け講習会等に出演。2019年4月、大阪芸術大学短期大学部保育学科客員教授に就任(株式会社ソングブックカフェ主催スペシャルコンサートチラシより抜粋)

★gaagaaSのプロフィール★

2013年10月結成。ギター担当のまつむらしんごと、キーボード担当のべっづのどかによる、自称ニューハイパーキッズミュージックユニット。2020年1月にgaagaaS(ガーガーズ)がソングレコードからCDデビュー!『あひるたいそう』の発売が開始されました。(株式会社ソングブックカフェfacebook、2020年1月12日の記事より抜粋)



夏季保育セミナー

【分科会A：感じたことを描いてみよう】

担当：高田先生(名短)、田端先生(桜大)

「感性を働かせて描く(味覚に注目して)」をテーマに、思いの作品をつくりました。甘い、辛い、苦い、酸っぱいと書かれたカードをひき、自分のカードの味をイメージし、クレパス、絵の具などで描きました。段ボールをカッターで切り、額をつくりました。

保育現場で行う上での講師からの助言として、次の2点が示されました。①水彩絵の具をペットボトルのキャップに色分けして入れ、乾かして使用すると使いやすいこと、②カッターは必ず縦向きに使うこと。

また、その後、参加者の作品を窓にはり、皆で味覚について話し合いました。実際に自分たちで描いてみると、たまたま描いた絵であっても、種類別に貼り分ければ色や形に共通点があることを発見できました。感覚に正解はなく、うまい・へたでもなく、自由にのびのびと書くことを大切にしながら、現場の子どもたちの感性や心のままに描くことができるようにする大切さを確認しました。また、テーマを設定するにあたっては、味覚以外の感覚があること。自分で完成させた作品を額に入れて飾ることで、作品を大切にしようという心を育むことも確認できました。



【分科会B：感じたことを音楽で表現してみよう】

担当：高須先生(名短)、五十嵐先生(桜大)

分科会Bで中心となったテーマは、①自分が感じたことをどのように表現して、聴く人に伝えるか、②子どもといっしょに音楽を楽しむには?③音楽をつくる楽しさを発見する、の3つでした。最初に参加者同士で自己紹介をし合い、担当クラスでの状況や悩みを出し合いました。また、それぞれの保育現場ではどのような音楽あそび(歌や楽器を使ったあそび)の指導を行っているかを確認し、子どもの年齢に応じた合奏のしかた、楽器の正しい扱い方などについて、分科会講師から具体的なアドバイスがされました。ピアノに合わせて「たなばた」を合奏し、キッチン用品を使って「南の島のハメハメハ大王」の音楽づくりをしました。音楽は実は自由遊びのなかで育まれていること、手話を入れたり、楽器を持つと、子どもは歌わなくなってしまう。5歳児は速い・遅い、音の大小・高低がわかればOKなど、分科会講師から直接、アドバイスが得られたことで、参加した卒業生たちはホッと安心できたようでした。その後の合奏や音楽づくりは動画撮影をして皆で見直すことで、その場での気づきが生まれ、さらなる工夫を皆で考えられました。



【分科会C：気になる子どものわらべ歌】

担当：山下先生(名短)

わらべ歌は、ふれあい遊びです。わらべ歌は子どもの運動感覚・平衡感覚・触覚の3つの感覚をつかうことで、子どもの発達を支援できる要素があります。具体的な子どもの行動から運動感覚・平衡感覚・触覚の発達をどのように見ることができているのかについての興味深いお話がされました。たとえば、運動感覚がうまく働かなければ、乱暴になったり、だらしなかったり、不器用だったり。平衡感覚がうまく働かなければ、走り回ったり、姿勢が崩れたり。こうした子どもの行動にだけ保育者が注目しがちな「気になる」子どもは実は「困った子」ではなく、子ども自身が「困っている子」なのです。子どもの「困った」ことに、保育者がわらべ歌でふれあいながらそっと寄り添うことで、子どもの行動を理解することができます。こうしたわらべ歌による「困っている子」への支援方法とするために、「あんたがたどこさ」「いろはにこんぺいとう」「いもむしごろごろ」「おおかぜこかぜ」を分科会の講師と卒業生たちが実際にうたって遊ぶことで、わらべ歌を日常の遊びに取り入れる楽しさや、わらべ歌の力を実感していました。



セミナー参加者の感想

- ・とつてもためになり良かったです。また来たいです。
- ・参加して良かったです。明日からの保育に活かしていきます。
- ・とつても良かったです。「虹」を聞いた時は泣けてしまいました。大学時代を思い出しました。
- ・鈴木翼先生がかっこ良かったです。
- ・保育のためになることが学べたり、落ち込んでも明日につながる大切な日なんだと思ったり、とても元気をもらえました。
- ・鈴木翼さん、ガーガーズの方との遊びが楽しく、また参加したい。
- ・無料で有名な方の講演を受けられるのは名短、桜花の強み
- ・鈴木翼さんの講演すごく良かったです。わらべうたも今後のために役立ちました。
- ・今日久しぶりに学校に来て、とても懐かしいと感じました。覚えたことを自分の保育にも取り入れていきたいと思いました。
- ・楽しかった。明日から使えそう。また来たいです。
- ・音楽体験ができて良かったです。食器で楽器、叩く機会がないから良かったです。
- ・みんなに会いたくて来ましたが、自分の保育を見直したり、新しい情報を得たりできました。とても貴重な経験ができました。
- ・半日楽しんで受講することができました。ありがとうございました。手遊び、歌等、日常に活かせるものがあって大変良かったです。
- ・とても良かったです。保育者論をやって下さる先生方の分科会が、もしあれば、参加したいです。
- ・事前に分科会の詳細も教えて欲しいです。
- ・明日から子どもと楽しく遊べるネタを沢山知ることができて、とても楽しくリフレッシュにもなりました。また機会があれば、分科会では「保護者との対応や「子どもとの関わり」など大学で受けたような授業を改めて聞きたいです。
- ・どれも明日からやってみたいと思うものばかりで、今日来て良かったなと思いました。

おわりに

ひさしぶりのキャンパスで出会った仲間や先生と、笑い声と笑顔あふれる時間を過ごすことができました。明日からの保育で子どもたちと笑顔で向き合えることを心から祈っています。また来年も保育の喜びや悩みも分け合える場を提供していきたいと思います。

冬の講演会 多様性がいきる保育 ～仲間と共に自己肯定感が育つ～

布施佐代子（桜花学園大学 保育学部）

2019年12月8日(日) 午後に、浜谷直人先生(首都大学東京 名誉教授)をお招きし、冬の講演会を開催しました。ご専門の「困難をかかえた子どもの保育臨床」の立場から、発達障がいや虐待などに起因して困難をかかえる子どもだけでなく、日常の保育場面でみられる子どもの多様な姿をどうとらえるか、多様性がいきる保育とは具体的にどのような保育なのか、保育実践事例を通して大切な問題提起をしていただき、270名余りの参加者一人ひとりが自身の子どもの見方や保育のあり方を真摯に振り返ることのできた貴重なひとときとなりました。

以下、講演の概要を紹介させていただきます。



多様性とは?…多様性の軽視と評価することの危うさ

- 多様性とは、それぞれに違いがあっても基本的に対等なものであり、かけっこの「速い、遅い」や絵の「上手さ」の違いなどのような子どもを単一の物差しで評価する序列化とは異なる。しかし、何気ない日常の中に、悪気はないのかもしれないが、多様性の軽視が見られることがある。

(例) 早く着替えた子どもに、「・・・ちゃんが一番だね」と褒める

- 多様性の軽視はしばしば序列化を生み出し、多様性を尊重しない土壌が競争し評価する保育をつくる。そうした保育の中では、序列や上下関係が子ども間に生まれ、居心地の悪い雰囲気生まれる。
- 他児との比較で、早くしたり、きちんとしたりすることなどを褒める(評価すること)には危うさが潜んでいる。褒めることは、自動的に、そうしない子、そうできない子を見下したりすることを含意する。「早いこと」を褒める(結果を評価する)

と、子どもは途中を丁寧に味わう気持ちが低下したり、過度な緊張でイライラしたり、評価されない場面ではしようしない二面性を持つようになる。このようなことの積み上げが、クラス内の仲間関係をぎすぎすさせたり、困難をかかえた子どもが不安定になったりすることにつながり、どの子どもにとっても自己肯定感を感じにくいクラスになっていく。

正しい保育・効率的な保育と楽しい保育

- 「正しいこと」「評価されること」を強く意識しすぎると、他者にたいして不寛容になり、他者のしていることの欠点を探したりするようになってしまい、楽しくなくなる。そこで「楽しい」を第一にして保育しているかが問われ、同時に「評価する・褒める」ことの危うさも考える必要がある。
- 評価に過敏で、友だちは間違っていて自分は正しいことを終始アピールし、不安定になる子どもがいる。子どもにかかわるおとなとして、よく考えることなく、褒めることが口癖になっていないだろうか?褒める言葉が持つ負の側面について自覚しているだろうか?

自己肯定感とは?

- 安心できる状況にあることが基盤であり、ありのままの自分を認め、自分が価値のある人間だと思えることができること。そのためにも、自分のありのままの姿を出すことができること、仲間が互いを尊重し合う関係にあることが大切である。
- 評価すること(褒める・叱責する)は自己肯定感を危うくする。

子どもの違いが活きる保育実践

- 事例① ブラックスワン実践
- 実践② 虫忍者実践
- 仲間と共に構築したことに自分が貢献した、自分は価値があると思えることができ、自己肯定感が高まる。

多様性を尊重し多様性を前提とする インクルーシブ保育の実践が示唆すること

- インクルージョンでは、どの子どもの意見も平等に尊重されて保育が創造される。
- 実践は局所における「楽しさ」から始まる。それがしだいにクラスの子どもたちを引き付けて、大きな活動へと発展す

る。そのほうが保育は自然。最初から全体活動を作ろうとした場合、排除が生じることを避けることはできない。

場面の切り替えの問題 — 多様性と自己肯定感の観点から —

- 切り替えができない(片づけを促しても、遊びをやめられない)という状況は、「具体的に指示し、見通しを与える」ことで改善されるだろうか?見通しが無い(次に何をすべきか分からない)から、切り替えられないのだろうか?

【実践事例】2歳児クラスの支援が必要なユタカ君 — 友だちの声かけ —

公園の外遊びからのお帰りの時になっても、まだ遊びたいユタカ君。保育士が「保育園に帰ってカレー食べよう」と誘っても応じず、走り出し、危険な柵を乗り越えようと足をかける。しかし、友だち二人が「ユタカ君、カレーだよ!早く帰ろうよ」と声をかけると、柵から足を下ろし、3人でみんなのところまで走っていった。

◆友だちの声かけ:保育士の声かけとどう違う?

保育士には「もう遊びはおしまいにしよう」「早く園に帰ろう」という下心があるが、子どもたちには下心はなく、素直に、カレーは美味しいから一緒に帰ろうと誘っており、嫌だったら帰らないことも認めている。

ユタカ君は自分の気持ちを尊重してくれる誘いなら、気持ちよく応じるのだろう。

◆友だちの声かけでかえってこじれる場合

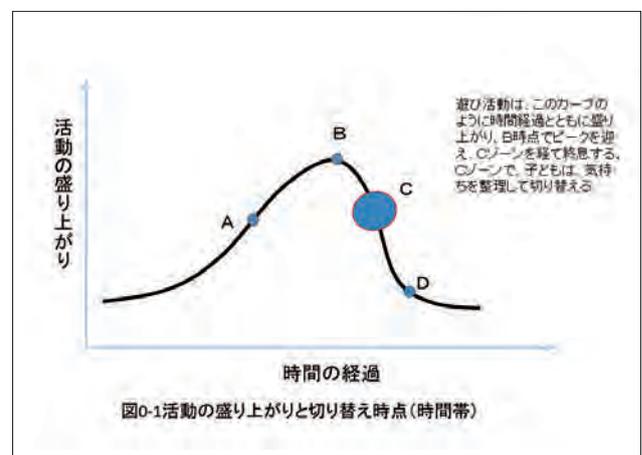
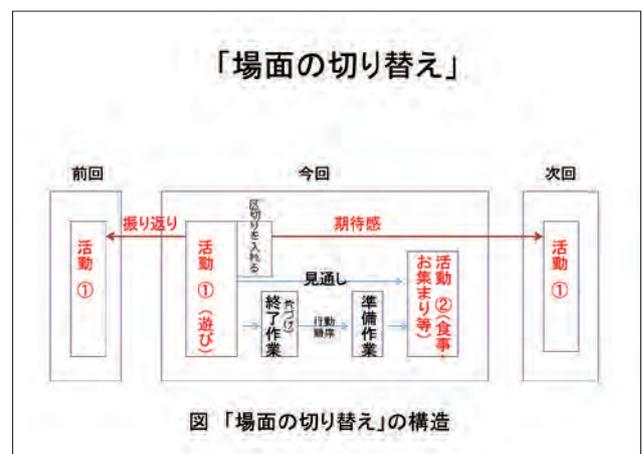
- 同じような状況で、友だちが声かけするとかえってこじれて、帰ろうとしなくなる場合がある。「いけないだよ」と咎めたり、ミニ先生のように言葉かけすると、素直に聞くことができず、ときには激しいいざこざになる。
- ユタカ君の先生は、どの子にも一人ひとりの気持ちを大事にして保育してきたため、子どもたちもユタカ君の気持ちを尊重して声かけし、ユタカ君もそれを受け入れた。そこには温かい保育の下地がある。

◆切り替えにくい…なぜか?

- 活動②に気持ちが向かわない理由があるとき(偏食があり給

食が苦痛、プールが怖い、隣の席の子と関係が悪い、ざわざわしているところが嫌など)

- クラスに競争的な関係が強い場合(自分だけ上手にできない、自分だけ遅れてしまうのが嫌など)
- 活動①が充実して経験できないままに、気持ちの整理ができないとき



【実践事例】2歳児クラスの切り替えが難しい、急かされてきたショウタ君

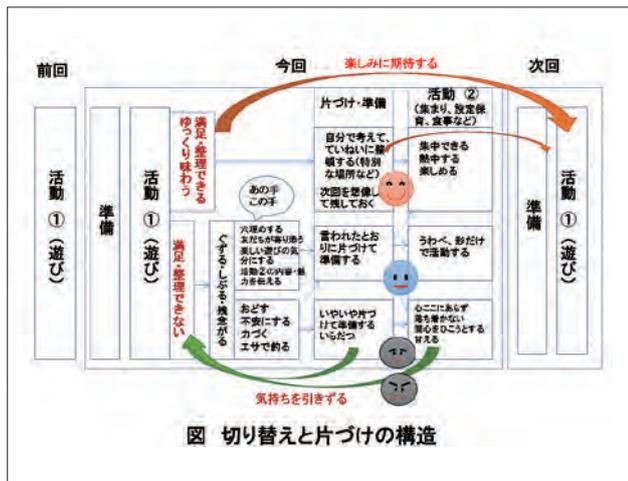
- 4月生まれで身体も大きく、力もあり、荒っぽい言い方が目立ち、生活リズムは崩れがちなショウタ君。お迎えのとき、これから着替えようとしているのに、もう「靴をはきなさい」と、いつも先に先に急かされてしまう。ちょっとしたことで気持ちが崩れ、そのままぐずることが多い。とくに登園時、公園からの帰り、午睡時などに、切り替えることに頑強に抵抗。

冬の講演会
多様性がいきる保育 ～仲間と共に自己肯定感が育つ～

◆時間で管理する保育から子どもの気持ちに応える保育への転換

・研究会で「切り替えの時に時間で管理していないか?」「何時になったら〇〇するという管理”する保育が、切り替える気持ちを阻んでいるのではないかと指摘され、ナミ先生は、時間に追われて保育している自分に気づいた。それからは、保育の予定や時間がずれることを想定し、子どもの気持ちをていねいに把握するようにした。ショウタ君が遊んでいる気持ちのピークが過ぎて、少し落ち着いてきたことを確かめて、そのタイミングまで待って、帰ろうの声かけをするよう徹底したところ、ショウタ君は見違えるようにスムーズに切り替えて、帰れるようになった。

◆遊ぶこむことで自然に切り替える気持ちになる



◆言葉をかけ過ぎる怖さ

◆「みんな」「同じ」という発想が切り替えを難しくする

課題を与えて、それをクラスの「みんな」が「同じ」「目標」「過程」「進捗」で進めようとするとき、切り替えが難しくなる子どもが出現する。

◆切り替えすぎる子ども

充実して活動していなかった(遊びこんでいなかった)のに、率先して切り替える子どもが抱える問題がある。(例えば、いつも切り替えスタンバイモードにいて、切り替え、片付けることを見てもらって「褒められたい」)その背景には、自己肯定感を感じることができない状況が考えられる。

保育における「多様性」をめぐる課題

- ・「多様性」を尊重することは大切な価値があり、公正で平等な楽しい未来の社会を創る子どもたちを育てることになる。しかし、「多様性」を尊重することは簡単なことではない。「一斉保育」では、しばしば序列と競争が価値になり、一部の子どもが排除されてしまう。
- ・「多様性」がいきてくる保育実践を学び合う必要がある。「正しい保育」だけでなく、「楽しい保育」、「遊ぶ」だけでなく「遊びこむ保育」、「みんな一緒に仲良く」ではなく「活動を媒介に仲間がつながる保育」実践について語り合おう。



浜谷先生には、具体的な保育実践事例をもとに、とくに活動の切り替えの難しい子どもをどうとらえ、どんな保育の工夫をしていくかという、現場でしばしばぶつかる課題について、ユーモアを交えながらわかりやすくお話していただき、参加者の中からも温かい共感の笑いやうなずきの姿が多く見られました。講演後その場で、参加者からの質問にも丁寧に応えていただきました。ありがとうございました。

講演で学ばせていただいた、何気ない日常の中にある多様性の軽視や評価することの危うさに留意しながら、子どもたち一人ひとりが集団の中で大切にされ、仲間と共に自己肯定感をしっかりと育んでいけるような多様性がいきる保育のあり方を、参加者の皆様がそれぞれ考え、学びを明日からの保育に活かしていただけるよう願っております。

参加者からのアンケート

- 今保育園で困っている現状を元に講演してもらい、インクルーシブ保育をすることで、子どもが自己肯定感を持ち安心して過ごしていけることが分かりました。子どもの困り感を大切に一人ひとりの気持ちを大切にしていきたいです。
- 聞き入ってしまう講演でした。片付けの切り替えが難しいと感じていたので、声かけや環境を変えていきたいと思います。
- 保育士の都合で子どもを動かす保育を今までしていると強く感じます。行事に追われると仕方ないこともあるので、新指針を見直して保育を変えていきたいです。
- 自分の言葉かけや活動を振り返る中でドキッとすることが多々ありました。多様性を守りながらも秩序も守る保育は何よりも子どもが楽しんで遊ぶ環境があってこそで、保育者主導ではないと感じました。頑張ります。
- 気持ちの切り替え→片付け方がつながっていることのお話はとても納得のいくお話でした。これからの保育で片付けをもっと大切なことと受け止めて見直していきたいです。全体でクラスを動かしていきがちなので、この考え方を改めていきたいと思いました。
- とても楽しく聞けました。まだ聞き足りないくらいです。自分の保育を見直していきたいと思います。
- 子どもの多様性のとらえ方がわかりました。楽しい活動ありきの子どもの動きは手にとるように分かりました。子どもが楽しい感じで過ごせるようにしたいと思いました。また先生の本を読んだり、研修に参加したいです。
- あたり前に思っていたり普段じっくり考えないようなことも振り返って考えることができ視野が広がりました。
- 主活動を大事に考えている保育園にいます。子どもたちがどの子も自主活動の中で自分を発揮していけるよう今回は、特に多様な子と対等になれる遊びを作っていきたいと思います。片付けのお話もわが園の先生たちにぜひ伝えていきます。
- 子どもの遊びの世界観を保育士も一緒に楽しむ遊び心を大切にしながら、何気ない私たちが口にする言葉や、単一の物差しで評価しているようなことはなかったか、振り返り考えさせられました。
- 多様性について考えるきっかけとなりました。子どもたちの育ちのための保育、自分でどう考え子どもに向き合っていくか、今一度しっかりと考え保育していきたいと強く思いました。
- 時間が短く、もっとじっくり聞きたかったです。子どもによりそいながら保育士の都合になっていないか見直していきたいと思います。
- 子どもの多様性を受け止める大切さを感じました。何よりも自分自身も楽しみ子どもも遊びこむことが、保育の充実に繋がると感じました。
- 楽しく講演を聞かせて頂きました。「多様性を尊重する」わかっているようでわかっていない所がたくさんあると感じました。
- 必ずしも“ほめる＝自己肯定感を育む”ではないと知りました。時間だからと活動を区切るのではなく、子どもが納得して切り替えられるような働きかけを考えていきたいと思いました。



子育て支援室「さくらんぼ」利用者へのインタビュー

子育て支援室には対象年齢を決めた交流会と、どの年齢の子も参加できる開放日があります。今回は開放日に支援室に伺い、保護者の方々にお子さんの様子や利用された感想などを伺いました。

Q：支援室に来るきっかけは何ですか？

- お母さん同士で話している時に、どこで遊んでいるかということが話題になり、この支援室を知りました。2年ほど来ていますが、家から車で5分くらいなので予定がない時にはすぐに行くことができ、週に1回以上は来ています。
- 3年ほど前に近所のお母さんと話をしていた、この支援室のことを知りました。何度か来ているうちにいつも合う顔なじみの人ができ、今では私の友達がとても多くなりました。
- 子どもが小さかった時に、近所の公園に行っても同年齢の子には会えないので、歩いて行ける子育て支援の場がないかとインターネットで探したところ、このホームページを見つけました。この辺りには支援室がないので近くにあるのが本当に良かったです。



Q：お子さんはどのような遊びをしていますか？

- 子どもはここに来ると室内にあるものを順に一通り遊んでからその中の気に入った場所で遊んでいます。
- 始めの頃は私を相手にして遊んでいたのが、一人で遊べるようになりました。色々なおもちゃで遊ぶうちに、ひも通しもできるようになりました。
- 自分一人だけで遊んでいた子どもが、友達の持っているものを見て「私もそれが欲しい」と言うようになりました。
- 乗り物が好きなので、ここに来ると汽車で遊ぶことが多いです。線路をつなぐのは私が手伝いますが、その後は一人で楽しそうに遊んでいます。



Q：支援室の良さはどんなところですか？

- 他の場所と違ってここには先生が常駐しているので安心です。先生には子どもの気になることを質問でき、分からないことがあれば何でも先生に聞くようにしています。
- 子どもが外で遊びたくなった時は、靴を履き替えなくてもすぐにウッドデッキに出て遊べるのがいいと思います。部屋の中から外がよく見えるので、私もあわててついていかなくても、少し様子を見ながら外に行くこともできます。
- いろいろなおもちゃがあったり、いもほりや粘土遊びなどのイベントもあって、家では経験できないことがここに来るとできるので子どもも喜んでいます。
- 大学生のお姉さんが来ると遊んでもらえるので、子どもは楽しみにしています。小さいころは知らない人なのでビクビクしていましたが、今は「お姉さん」と言って自分から声を掛けられるようになりました。
- この先生は子どもとの遊び方が上手なので、子どもは楽しく遊んでもらっています。遊んでほしい時は、「先生」と自分から声を掛けていきます。
- いつも自分の子しか見ていないのでちゃんと育てているか心配でしたが、ここに来るようになって他の子を見ると安心します。いつ歩いたか、いつ話すようになったかなど、他のお母さんに聞くこともできるので参考になります。



Q：お母さん同士のつながりはできましたか？

- 0歳の時から週に2~3回来ています。子どもの月齢が近いお母さんといういろいろな話をするうちに仲良くなりました。
- この近くに住む人から小学校の情報をもらうことができます。上の子が



通っている小学校のことが分かるので便利です。

- 子どもがもうすぐ幼稚園に入ります。この地域には幼稚園がたくさんあってどこにするか迷っていましたが、先輩のお母さんから上の子が通っている園の情報をもらい、活かすことができました。
- 上の子が小さかった4年ほど前から週に1回は来ています。年齢ごとに分けているため同じようなことが話題になり、言葉のことや離乳食のことなどを聞きやすいです。誕生日がくるとクラスが変わるため、開放日に一緒に来るようにしています。

Q：イベントや講座に参加されたことはありますか？

- クリスマス会に参加しました。ミュージカルのように私はとても楽しかったのですが、家の子は小さすぎて途中で飽きてしまいました。
- 以前に運動教室に参加したことがあります。少し難しそうなことでしたが子どもは一生懸命やっていました。なぜ年齢制限があると思いましたが、子どもを見ていて小さすぎる子にはできないことがわかりました。

Q：支援を利用した感想は？

- 他の支援室に比べておもちゃはよく揃っていると思います。いろいろな種類があるので、子どもは自分の気に入ったおも

ちゃで遊ぶことができます。

- この部屋は子どもが遊ぶにはちょうど良い広さだと思います。広すぎると子どもが走り回って危ないこともありますが、ここでは子どもが遊ぶのを見ながら他のお母さんともゆつくり話ができます。
- 以前は午前中に遊ぶだけで満足できたのですが、今では力がついてきて午後



も遊びたくなくなってしまいます。週に1度ですが午後もある日があるので助かっています。

子育て支援室「さくらんぼ」には、元気な子どもの姿とお母さんの笑顔があふれています。保育者がいて、いつも子どもを見守ったり相談に応じたりしていることが保護者の方の安心に繋がっているようです。これからも多くの方に利用していただけるように、運営を工夫していきたいと思っています。

(文責 神谷妃登美)

■ 2019年度 子育て交流会、支援室開放日 利用者数

2020/2/28現在

	交流会/回	子ども	大人	学生	開放日/回	子ども	大人	学生
4月	7	116	106	22	4	56	48	5
5月	12	185	165	58	7	71	64	4
6月	13	177	163	82	7	83	60	22
7月	7	108	97	43	3	48	39	1
9月	11	181	152	49	7	108	88	19
10月	13	171	154	105	3	29	26	3
11月	12	196	176	40	8	112	103	39
12月	8	86	76	2	6	78	64	45
1月	10	160	135	27	6	90	76	20
2月	11	162	134	50	6	106	96	2
3月*	—	—	—	—	—	—	—	—
計	104	1542	1358	478	57	781	664	160

※新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の為、3月は閉室とさせていただきます。

子育て支援室「さくらんぼ」ボランティア学生の声

「さくらんぼ」でボランティア経験のある桜花学園大学保育学部保育学科の学生4名（4年:菰田真由さん、3年:明壁沙紀さん、2年:櫻井綾乃さん、1年:磯貝琳香さん）にインタビューを行いました。授業や実習での学びとつなげることができていたり、学生もボランティアを通して多くの気づきがあるようです。



Q：ここでボランティアをするきっかけは？

磯貝：乳児と関わる機会が少なくて、ここだったらいっぱい学べるかもと思って。

櫻井：授業中やピアノの練習をする時に、子どもの声が聞こえたり、子どもが遊んでいるのを見てかわいいなあと思っていました。ボランティアができると思ったので。

明壁：太田先生の授業（乳児保育）でこの存在を知った。1度来てみて、こんなに色々なことをやっているのを知って。0、1、2歳など普段あまり関われない子どもと関わると知り、積極的に参加していきたいと思った。

菰田：卒業研究で子育てをしているお母さんを対象にアンケートをさせていただいたので。

Q：実際、やってみた感想は？

磯貝：乳児との関わり方が分からなかったが、話しかけたら笑ってくれ嬉しかった。保護者の方とも会話をすることで勉強になった。

櫻井：最初は どうやって関わっていいかと思った。子どもが人見知りで、すぐにお母さんにくっついて、親子の絆も見ることができた。お母さんともいっぱいお話できて、そんな機会ないから嬉しい。

明壁：保育士さんの遊び方、絵本の読み聞かせの仕方などを

間近で見られて学びになっている。また、ここでの経験が、実習先でも活かされ、子どもに入って行けるようになった。あと、保護者と保育士のやりとりを聞けるので学びになった。

菰田：お母さんと保育士さんが雑談をしている中でも、「最近どうですか？」みたいに自然にお母さんの悩みを保育士さんが引き出しているなあというのを見ることができた。

Q：環境構成やこの玩具の気づきは？

磯貝：ボールプール。乳児でもここに入って、保育者や保護者がパシャパシャするだけですごく喜んで、乳児でも楽しめる遊びになっている工夫があると思う。

櫻井：黄色い紐、これは子どもによって遊び方が違う。出し入れする子もいれば、ラーメンに見立ててすすったりしている。子どもが考えて遊んでいる。「教えて」というと教えてくれる。



明壁：（布でできている野菜果物コーナー内に）枝豆やバナナがあるんですけど、枝豆にチャックがついていて、ちゃんと豆が出てくる仕掛けになっているんだ！と。あと、音が出るのも興味もって遊んでいる子もいるから、音のある遊びがあるのはいいなあと思った。

菰田：お気に入りの玩具は洗濯機。動くのがすごいなあと思って。あとは…、玩具の消毒を保育士さんがしている。特に0、1、2歳は口に入れたりする子が多いから、子どもが帰った後に、次の日への準備、清潔にすることが大事だっていうことを間近で学びました。



Q：保護者は目上の方ばかり、難しさは？

磯貝：ここに来るまでは保護者との関わりはないから、どうしたらいいかわからなかったけど、だんだん、色々な子どもたちの話を聞けて、色々な保護者の方がいて、どう対応したらいいのかの勉強にもなった。

櫻井：最初は関わり方わからなかったけど、お母さん同士が子どもの悩みを話していたり、私にも「どう？」って聞いてくれて会話に入っていけて嬉しかったし、そういう機会ないし、お母さん同士も同じ年齢の子どもがいるから、自分の悩みを話せる場所があるのはいいなあと思った。

明壁：質問とかはできたかも。人と話せる、保護者と実習先でもあまり関われないので、しゃべりやすくなったかも。

菰田：実習でもあまり話せていないので、ここの保育士さんを見て勉強しなきゃなと思った。

Q：もっと勉強しなきゃ！と思うことは？

磯貝：1対1での子どもとの遊び方。あと、もっと遊び道具の使い方やどういうふうに使えばいいのかとか。どういう接し方をすればいいのかも。

櫻井：2回目に参加した時、子どもの様子がいつもと違うようで（機嫌悪かった）、保育士さんがすぐにそれに気づいて、お母さんと「今日どうしたんだろう？」って話していて。それで、体を見て「突発性発疹」って保育士さんが気づいて。私も「子どもの保健」で勉強したけど、その時は「なんだっけ？」となってしまって。だから、子どもの病気とか、原因とか治療法とかセットで覚えてなきゃいけないなあと思った。

明壁：子どもと遊んでいく中で、環境設定。遊びをどういうふう配置していくのか。子どもが触りやすいようにどう設置していくのかとかを学んでいかないといけない。あとは、保護者と子どもが遊んでいるのに、入っていくのが苦手で…。保育士さんを見ていると、すぐ自然に入っていくから、そういうのもこれから。

菰田：やっぱりお母さんと話をする時。こういうアドバイスができるようにならないといけないなあと感じました。



ま と め

子どもとの関わり方、保護者との関わり方、それぞれ初めは緊張や不安を抱えながらスタートしていたようですが、さくらんぼでの保育士の先生方を観察し、まねることで、徐々に慣れていったようです。

学年進行とともに着眼点も広く深くなっているように感じます。机上の勉強だけでなく、さくらんぼでの実践が、彼女たちの保育者としての学びにつながってくれることを願うばかりです。

(文責 堀 由里)

★ 子育て講座 ★

子どもたちの健やかな成長を目指す“親子運動ひろばin 名短”

5～7月(5回)、10～11月(4回) 保育科 平野朋枝

“親子運動ひろば in 名短”の開催は、今年度で7年目を迎えました。幼児期の適切な身体発達には、からだを動かすことが非常に重要です。歩行が安定する1歳後半からは、走ったり、くぐったり、登ったり、降りたりと、様々な動きができるようになります。そういった時期に、より多くの動作を経験して欲しいと考え、親子で参加してもらう遊び環境を提供しています。

遊び環境作りと活動のサポートは、名古屋短期大学保育科の学生が行いました。子どもたちは、ママに寄り添ってもらい、お姉さんの励ましを受けながら、「できた」という気持ちをたくさん味わうことができました。



音楽劇を楽しもう!

2019/6/24, 7/1 保育科 高須裕美

保育専攻科生による2つの音楽劇を講座で観劇しました。1つ目は“ミッキーのハッピーサプライズ” 素敵なバンドに合わせて、子ども達も踊りたくなくて我慢できず、ステージに上がって踊りました。2つ目“The very cranky bear”は、留学から帰国した学生達が英語上演に挑戦しました。子ども達は、動物達の動きや鳴き声を頼りに、驚いたり笑ったりのひと時を過ごしました。



クリスマス会

2019/11/29 保育学部保育学科 基村昌代

毎年恒例のクリスマス会。名古屋短期大学附属幼稚園のホールで行われ、子ども71名、大人63名の計134名という大変多くの方にお越しいただきました。内容は桜花学園大学保育学部保育学科4年基村ゼミ生9名によるオペレッタ「オズの魔法使い」の鑑賞です。音楽に合わせて体を動かしているお子さんや、怖い魔女が出てきて涙を流してしまうお子さんがいましたが、保護者の方が声をかけながら観て下さり、最後には大きな拍手をいただくことが出来ました。出演者と参加者の方々が一体になって楽しめた時間になったのではないかと考えております。多くの方々に足をお運びいただきまして、ありがとうございました。



はじめての粘土遊び

2020/2/14 保育学部保育学科 太田早津美

2020年2月14日に小麦粉粘土を使った粘土遊びをしました。事前に申し込みのあった26組の親子(子ども34名)が参加し、粘土遊びを楽しみました。

粘土遊びは指でその感触を楽しみながら、五感を刺激し創造力を高めることができます。

初めての粘土の感触にちょっと戸惑っている子や、型はめが上手にでき喜んでいる子を温かく見守るお母さんの様子が目に留まりました。20分ほどで、飽きてしまうお子さんもいましたが、2歳後半から3歳に近いお子さんはしっかり集中して遊べていました。

参加されたお母さんから「親にとっても、こうして子どもと一緒に無心に遊ぶ時間は必要ですね。」とっていただきました。



小麦粉粘土は、前日に小麦粉、塩、油、水を入れてよくこね、食紅で色を付けて作りました。食品が材料ですので、小さいお子さんにも安心な教材です。ぜひご家庭でも作ってみてください。

2020年度事業計画

チャイルドエデュケア研究所では、2020年度のテーマを「関係性のなかで育つ子ども」としました。このテーマに沿ったセミナーや講演会等の開催を通じて、地域の保育者や子育て家庭、学生、卒業生を対象とした研修の機会を提供し、地域とのつながりを重視した事業を展開していきます。その他、子育て交流室「さくらんぼ」、子育て講座等、今年度同様に実施していきます。また、地域で活躍されている子育て応援のNPO団体とも協力し、6月21日(日)には「子育てハッピーさくらんぼ」と題して、乳幼児を抱えたご家族が楽しめる・学べるイベントを企画致します。

夏のセミナー

- 講 演: 松本猛氏 (美術・絵本評論家、安曇野ちひろ美術館 館長)
- 演 題: 「母、いわさきちひろが描いた 子どもと平和」
- 日 時: 2020年7月26日(日)
- 場 所: 桜花学園大学・名古屋短期大学

冬の講演会

- 講 演: 掛札逸美氏 (NPO法人 保育の安全研究・教育センター 代表理事)
- 演 題: 「赤ちゃんの脳を作る親と保育者の話しかけ(仮)」
- 日 時: 2020年11月15日(日)
- 場 所: 桜花学園大学・名古屋短期大学

編集後記

「チャイルドエデュケア研究所年報」第17号をここにお届けします。本号では、研究所が主催する夏季保育セミナーや冬の講演会の報告、また子育て交流会等の報告といった研修・事業部門の報告、そして桜花学園大学保育学部や名古屋短期大学保育科の教員による研究・実践報告を収めております。それらは、今年度の研究所のテーマである「子どもが生き生きと育つための環境や保育者の関わり方」に沿った内容でご講演、ご寄稿いただきました。研究者だけでなく、地域の実践者、子育て家庭の皆さまにも、本研究所の取り組みをご理解いただき、一緒にこれからの保育・教育・子育てについて考えるきっかけになれば幸いです。

【2019年度 研究所役員体制】

- | | | | | |
|--------|-------|--------|-------|-----------|
| ●所 長 | 太田早津美 | ●主任研究員 | 神谷妃登美 | 吉田真弓 |
| ●副 所 長 | 高須裕美 | | 布施佐代子 | 嶋守さやか 堀由里 |
| ●事務局員 | 本多美須子 | | | |

表紙デザイン

高田吉朗 (保育科)